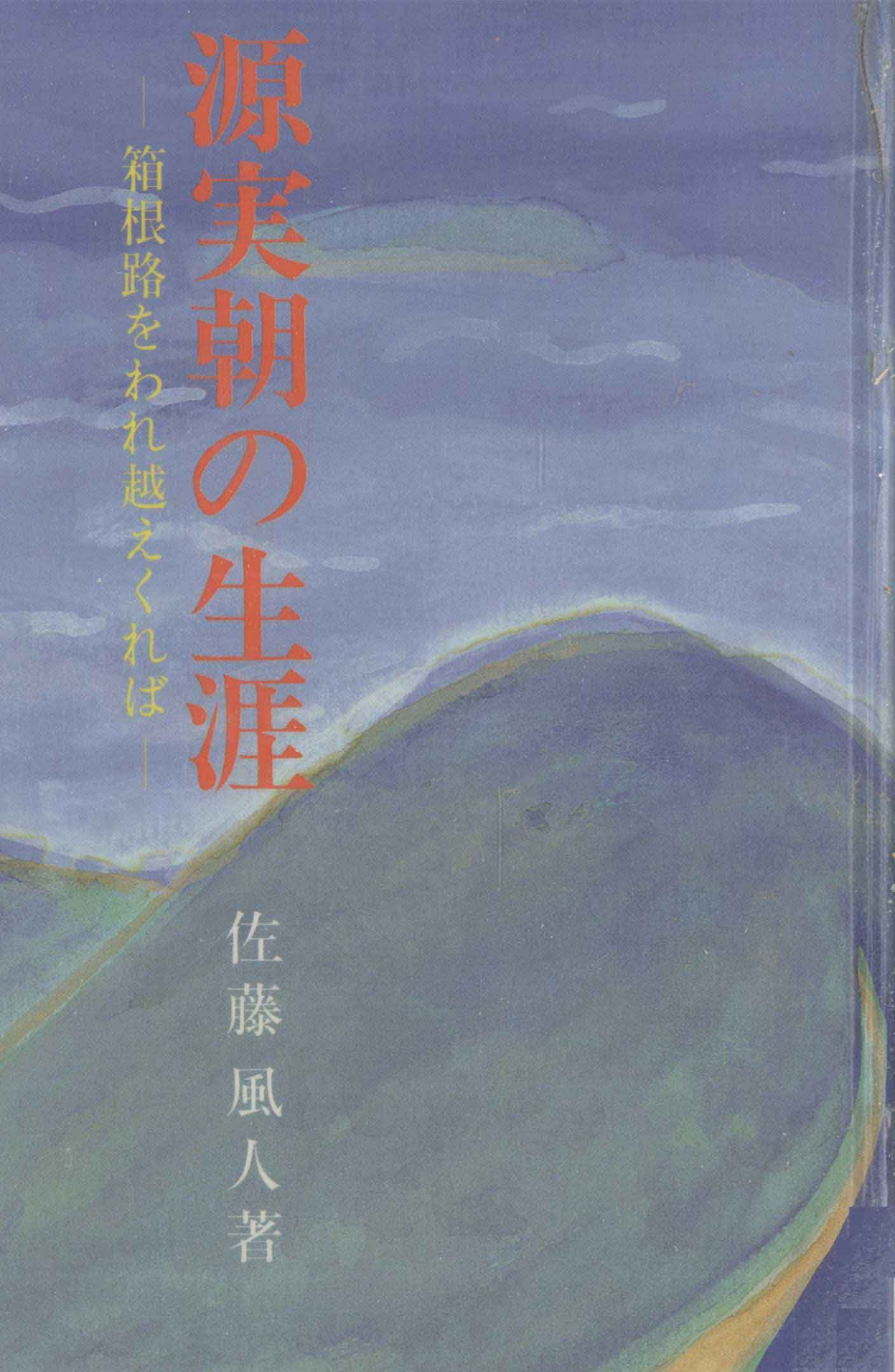




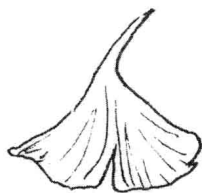
源実朝の生涯

箱根路をわれ越えくれば

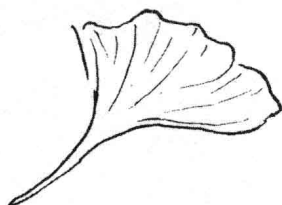
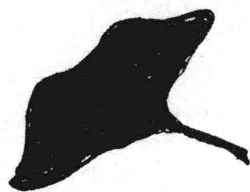
佐藤風人著

源実朝の生涯

—箱根路をわれ越えくれば—



佐藤風人著



著者略歴

佐藤 風人 (さとうふうじん)

本名義弘。大正五年群馬県中之条町に生る。

父は大正時代の中之条町朝日座興行主佐藤代吉。

昭和15年警視庁に奉職・後東京都に転じ昭和53年退職。

昭和38年「上州時雨笠」大江美智子一座で上演。北条秀司主宰「十日夜」に属す。

群馬ペンクラブ会員。「風雷」「白馬」同人。

現代俳句協会会員。俳句作家連盟役員。

月刊「総合時事俳壇」選者。

著書 句碑物語抄(暁印書館)

住所〒165東京都中野区野方1-56-2

(03)-389-2808



源実朝の生涯

発行所	東京都文京区小石川一の十三の二 振替 東京 二二二四七四 〒112 電話 (〇三) 八一四 〇八五三 FAX (〇三) 八一四 〇八五四	発行者 早 武 忠 良	著者 佐藤 風人	一九八八年十一月十五日 印刷 一九八八年十一月二十五日 発行	定価一、八〇〇円
	株式会社 暁印書館				

(落丁・乱丁等については責任を持ちます)

検印廃止 ©

印刷(株)和晃・徳住製本

ISBN4-87015-084-0 C0093

序 文

演劇舞踊作家・元国立劇場参事・演出室長 長田 午狂

句碑めぐりをライフワークの一つにして、昭和六十三年三月には『句碑物語抄』を刊行するなど、たゆまぬ努力を続けている佐藤風人君が、このたび歴史小説『源実朝の生涯―箱根路をわれ越えくれば―』を出版することになった。これは昭和五十一年から同五十七年まで、七十三回に亘って俳誌『さいかち』に連載し、頗る好評を博した同君の優れた力作である。内容は鎌倉幕府初代將軍頼朝の二男に生まれた源実朝が、自分の意志に反した方向に運命を変えられ、力と頼む源氏の武將を次々と誅殺されて己れの命運を悟り、甥の公暁に鶴岡八幡で暗殺される悲劇と短い一生が描かれている。

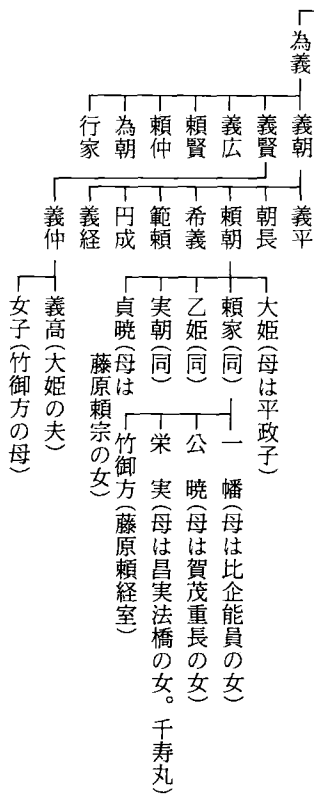
その筋の運びは、史実や古典文学を綯いませながら、それらに書かれていない個所を、みずからの創作で綴っているが、この部分にむしろ信憑性がある。と言うのも、作者が句碑めぐりと同様に、総て現場を実地に踏査して、納得のゆくまで探索した結果の貴重な集積だからである。かなりの長篇だが、中でも作者が最も力を注いだ件りには、畠山重忠の終焉えん、兄の源頼家の最期とそれを偲ぶ実朝の心情、和田義盛の敗亡、実朝の箱根伊豆路の二所詣、死の前夜の実朝、御台所の帰洛などが挙げられる。また登場人物の言葉遣いを古典調で統一しているのは、劇化する際を考えての配慮である。

そう言えば、風人君は戦後の第三次・舞台社（岡本綺堂創設）を基盤とする北條秀司師の戯曲研究会に所属していたが、それが縁で特に風人君から請われて、舞台社同人であった私が個人的に劇作の指導を行なうようになり、風人君の戯曲『上州時雨笠』を大江美智子一座が昭和三十八年七月に大阪の中座で、翌八月に京都の南座で上演しているし、昭和四十九年には戯曲『百歳』を、また昭和五十一年には戯曲『箱根路・実朝二所詣』を、いずれも『三人誌』に発表している。聞けば将来、さらに小説『源実朝の生涯』の全篇を改めて戯曲化す予定であると言う。ここに同君の増々の健筆を祈り、今後の創作活動を大いに期待したいと思う。

昭和六十三年八月六日

源氏系図

清和天皇—貞純親王—源經基—滿仲—賴光
 (六孫王)
 源經基—賴信—賴義—義家—義親



小野寺八枝著「槐門遺芳」より

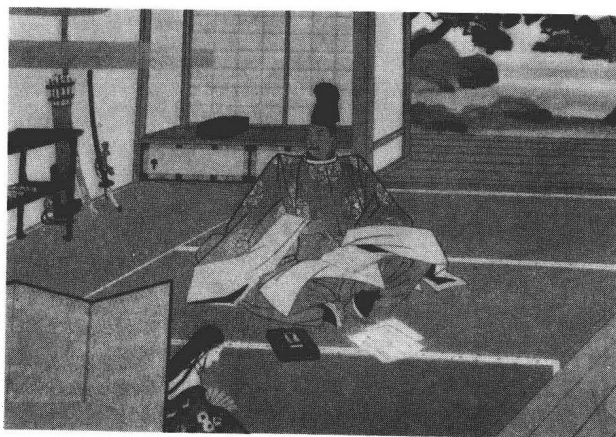
目次

序文——長田午狂

はじめに

一、実朝誕生……………	6
二、裾野の仇討……………	16
三、冬の雁……………	31
四、頼家段かづら……………	46
五、名木散る梶原一族……………	61
六、慟哭比企谷の落日……………	79
七、悲秋の人……………	97
八、秋の曙……………	108
九、花の座月の座……………	118
一〇、名残りの夏月夜……………	129
一一、実朝嫁娶合戦……………	149

一二、清烈夏風陣記	160
一三、涼月亭の危機	176
一四、二所詣箱根の旅	187
一五、嵐の前	199
一六、薰風和田合戦	214
一七、唐船建造	230
一八、公曉東下	237
一九、黒い雲	245
二〇、雪の饗宴	257
二一、御台所帰洛	270
源実朝の生涯完結に際して	277
金槐抄余滴	279
一、その後の御台所	279
二、実朝の首の行方	282



源実朝の詠歌(坂内青風筆)鶴岡八幡宮収蔵

はじめに

「人麿のちの歌よみは誰かあらん征夷大將軍源実朝」と詠んだくらい、子規は実朝の歌を推賞している。徳川中葉には加茂真淵が「鎌倉のおほまうちぎみは、この京このかたの一人なり」とその真価を高唱している。もっとも実朝の師匠で反万葉風の歌人藤原定家すら「鎌倉の右府はたけたる歌よみとこそ思ほゆれ、この歌を見る時は歌はものうくなりぬ」と実朝の歌を褒めている。

思うに、定家、真淵、子規と、これにつづいて斎藤茂吉が高く実朝の歌を評価しているのは、その万葉ぶりにありと思われる。

箱根路を旅した人は誰でも、

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

実朝

の一首を思い出し、日金山（十国峠）の上に立つて眼下に浮かぶ初島の可愛らしい島影を見れば、誰でもしばし茫然とすることだろう。

実朝の家集はその身分の通り右大臣家集と呼ばれていたが、いつの頃からか金槐和歌集と呼ばれるようになった……。金は鎌倉の鎌の字の偏にとり、槐は周代に「朝廷に三槐を植え、三公に面して坐す」とあって、周の代では太師、太伝、大保を三公とよび、唐の時代は大尉、司徒、司空を三公と称した。日本では太政大臣、左右大臣を唐名で呼んで三公と呼んだ。されば槐は大臣の意味である。言つてみれば鎌倉右大臣家集と同じことになる。（大塚久著、將軍実朝より）

この集に収められた歌は七百十七首また七百十五首とも言われている。細別すると、

春 百三十二首 夏 百四十七首

秋 百三十二首

冬 百九十五首

恋 百五十六首

雑 百五十五首

これは昭和四年に岩波書店から発行された斎藤茂吉の金槐和歌集によるものだが、この集には貞享本、類従本、定家所伝本などがあるし、写本もあるので歌数については好事家の研究にお委せしたい。

さて、わたしは右大臣実朝の歌について述べるつもりはないが、実朝その人を書こうと思えば、どうしてもその幾つかの歌にかかわらざるを得ない。わたしが三十余年前応召兵として外地に居た時、かの「箱根路」の歌に心ひかれて実朝の戯曲を書こうと思ったが、去年の春やつとのことで、これを同人誌「三人」に発表することが出来た。題はちゅうちよなく「箱根路」とし、実朝二所詣：の副題をつけた。天下の將軍の旅行はついに、箱根権現、伊豆の走湯権現、三島明神の三社を結ぶいわゆる二所詣の旅、箱根路に限られていたのである。只一度、京へ上ることもなかったのである。

わたしは過ぐる年の早春の日、只一人自分の足で二所詣の旅をしたことがあった。今考えても実朝の心のうちが惻々と胸に迫る思いがする。

ところで、金槐集の歌論解釈や実朝の伝記などは多くの大家新進がこれを書いているが、小説や戯曲になるとあまり多くはないようである。わたしが調べたものをいくつか掲げて見ると

戯曲 名残の星月夜

坪内逍遙

“ 実朝の死

武者小路実篤

〃	源実朝	小倉 衛
〃	実朝出帆	山崎 正和
脚本	実朝卿渡宋船記（大谷図書館蔵）	
小説	源実朝	大仏 次郎
〃	右大臣実朝	太宰 治

などであろう。

その他、珍らしいのは俳人の菅裸馬氏が「歌人実朝・実朝哀話」という本を出している。歌人の塚本邦男氏が歴史読本に書いた「萩月遁走・源実朝考」も有益な小品である。

いづれにしても小説戯曲の数が少ないのは実朝は文弱の人で、当時の坂東武者源家の統領としての識見力量がなかったと思われ勝ちで、小説的劇的題材に仕難いものではあるまいかと思われる。大仏次郎は実朝が十三歳で將軍職につき二十八歳で公暁のために一命を落とすまで淡々とした筆調で書いている。太宰治は「右大臣実朝」を書くにあたり「今月の二十日頃迄に短篇などの仕事を全部片づけて、それからいよいよ「実朝」にかかるつもり、ナイテ血ヲ吐クホトトギス、といふ気持ちです。来年は私も三十五歳ですから、一つ中期の佳作を残したいと思ひます」と知人に書信を送っている。昭和十七年十月十七日のことでこの年は実朝生誕七百五十年に当る。太宰がそれを意識したかどうかかわからないが、鎌倉では盛大な実朝生誕七百五十年祭が行われた。太宰治は翌十八年に甲府で「右大臣実朝」を書き上げた。そして五年後の昭和二十三年の六月雨の一夜、みずから命を断つたことは人の識るところである。

これからわたしは、戯曲「箱根路」では書き得なかった実朝を書いてみようと思う。

一口に言つて、実朝はあまりにも早く將軍になりすぎた。いや將軍の座につかせられてしまったのである、源氏三代を護り例え養子を迎えても四代にこれを繼承する術策と配慮が整わぬ若輩のうちに、いつの間にか北条方のためにがんじがらめにされていたのである。これは母政子の大きな誤算であり、いかなる論法で政子を弁護しようとわたしは承服しない。頼家を殺しその子供達の小さな命までも断ち、更に実朝、公暁を同時に死に追いやった罪は義時は勿論だが、罪の大半は政子にあると思つてゐる。一片の愛情すらないとまでは言わないが、何故もつとわが子や孫の生命を護る手段を講じなかったか。権謀術策、鎌倉幕府の政權を維持するためには、やむにやまれぬ仕儀というのだろうか……。

もの言わぬよものけだものすらだにもあわれなるかなや親の子を思ふ

実朝の歌の中で、ものかなしく母を思う情の綿々としてつきない歌ではないか……。世に親を思わぬ子はなく、それ以上に母親というものは子を思うのが常である。自分のことで恐縮だが、かつて昭和十八年の春満州に応召していたわたしが帰還することになり故郷の母に知らせると、半月程して姉から便りがあつた。母は一日千秋の思いで帰還を待つてゐる旨が書き綴られ、そして、

満州の便りつきけり君待つとたらちねの母は衣縫いいます

の歌が付けられてあつた。帰還した夜わたしが床に入ると、母はいつもとかわりなくわたしの掛布団の四すみを軽く叩いて、寒くないようにしてくれたのだつた。

竹乃里歌集 金槐集を読み

試みに君の御歌を吟ずれば堪えずや鬼の泣く声聞ゆ

子規もまた病床に実朝の短かった生涯を思うとき容易に眠れなかったのであろう。

さて実朝を書く資料は、私の机上にある程度は集った。あとは実地に踏査して当時の夢の世界に入るだけである。山の空気を吸いたいときは山に登るがよい。波の音を聞きたければ海に向かつて佇つのが一番である。実朝の住んだ館の跡、歩いた道はすっかり変ったが、そこに行けば何かが得られるのである。わたしはわたしなりに大好きな実朝と、そしてその夫人の後のことも書いてゆくつもりである。

一、実朝誕生

源氏は、清和天皇より出づ。天皇の宮人王氏、貞純親王を生む。四品に叙し、兵部卿に任ぜられ、桃園親王と称せり。親王二子あり。経基と曰ひ、経生と曰ふ。皆源氏姓を賜る。

これは頼山陽著（池辺義象述）邦文日本外史卷二源氏正記上の有名な書き出しである。

即ち、源経基を源氏の初代とすると二代満中、三代頼信、四代頼義、五代八幡太郎義家、六代義親、七代為義、八代義朝、九代目が恵源太義平となる。義平の下に、朝長、頼朝、希義、範頼、円成、義経などの弟や女子がいる。それにしても子供はたくさんつくっておくものだ。義朝も義平も平家に敗れて殺されたが、義朝の三人目の子頼朝は、範頼や義経と力を合わせて平家一門を西海に葬り見事父や兄、その他一門の仇を討った。そして後には鎌倉幕府の創立者となり源家の初代將軍になった。

頼朝に、長女大姫、長子頼家、二女乙姫、そして二男実朝がいる。この四人はいずれも正室政子との間に出来た子だが、もう一人藤原頼宗の女子との仲に生まれた腹違いの子がいて、名を貞暁という。男三人女二人当時としては普通の子持ちである。

頼朝が鎌倉に始めて入ったのは治承四年秋である。一旦は石橋山の合戦で大庭景親の平家の軍勢に敗れ海路安房に逃げたがここで勢いを盛り返した。そして下総の豪族千葉常胤の進言により鎌倉を本據の地と定めたといわれる。

その第一の理由は、鎌倉が東、西、北を山に囲まれ、南は海に面した要害の地だったからで、山

は高くはないが険しく谷々が連り、平地は極めて少なく護るに固いと判断したからであろう。それでいて東国各地から軍勢が馳せ参ずるには交通の便のよい土地である。もう一つ大きな理由は、源氏父祖縁故の地であることの二つだった。——今は亡くなったが殊の他鎌倉を愛し、鎌倉の史実に詳しくかつた鶴岡八幡宮の官司だった座田きだ司氏もりうじ氏は、昭和二十一年に出した「史都鎌倉」に、頼朝がなぜ猫の額のような鎌倉に居を定めたかを次のように述べている。

由来鎌倉の開発は頗る古く、藤原鎌足公がまだ鎌子と言った頃、宿願の筋があつて、鹿島神宮に参詣の途中、この由比の里に泊つた夜霊夢を感じ、年来所持していた「鎌」を松ヶ岡の地、今の鶴岡八幡宮の後の大臣山に埋めたところから鎌倉と称したと伝えられ、その後鎌足公の玄孫やしろ染屋太郎大夫時忠という者、この地に居住して東八カ国を領していた。更に降つて頼朝数代以前の祖先、源頼義公が時の朝廷から相模守に任ぜられ下降した時、その正庁を鎌倉におき相模一円を統治した。又頼義公が東北地方征定の勅命を受け発向の途次に、鎌倉に立ち寄り、遠く京都の石清水八幡宮に祈願をこめ、この征定成就の暁は、豫ねて縁故の鎌倉に八幡宮を遷し祀り、朝夕に信仰の誠を致さんと申し、弥々凱旋の帰途、前の誓いを果して、この地の海岸由比郷に社殿を建立して八幡宮を鎮祭した。その後頼義の子である有名な八幡太郎義家も再度の奥州征伐の途次、この由比郷の八幡宮に参拝したと伝えている。これが現今の鶴岡八幡宮の前身である……と。

鎌足公が鎌を埋めたところから鎌倉と称したという由来は面白い。そして地元の人とはともかく、この史都を訪れる人は鶴岡八幡宮に参詣することを鎌倉見物の第一としているのは当然だが、この元宮である由比郷の元八幡の由来を知り、ここに詣でる人は少ないようだ。それはちやうど、深川の富岡八幡宮の元宮が砂町の元八幡であるように、人はその由来の源泉をともしれば忘れ勝ちのよ



鎌倉市材木座にある元八幡（由比若宮）

うである。源頼義が由比郷鶴岡の地に石清水八幡宮を祀ってから、その五代の後裔頼朝が現在の地に八幡宮を遷し祀り、これを鶴岡八幡宮と称するようになった。即ち大臣山の中腹に社殿を営んだわけである。

過ぐる年の晩秋の一日、私はこの由比郷の元八幡をたづねたことがあった。——鎌倉駅の正面から若宮通を横切って向側に渡り、頼朝評定所跡から大朽寺、本覚寺を出て材木座の海岸方面に向い夷堂橋という小さな橋を渡る。妙法寺やぼたもち寺の門前を過ぎ、横須賀線の踏切を渡ると、左側に餅菓子屋があつて団子などを売っている。その向側の路地の角に、元八幡の古い小さな道しるべがありこの路地を入れて小半町、元八幡の小祠の前に出る。四方を住宅で囲まれた約二百坪程の境内で、昭和三年三月鎌倉町青年団が建てた「元八幡」の板碑がある。碑文には前に述べたような由来があり、その中に「鶴ヶ岡トハ昔時此地ヲ呼ビタルナラム：」の一節があつた。また八幡太郎義